

# 日米親善委員会と砂川町の対応

——砂川闘争前後での在日米軍に対するスタンスの変化——

沖 川 伸 夫

- 一 六〇年目を迎える砂川闘争——はじめにかえて
- 二 日米地方連絡協議会とは
- 三 米軍横田基地と日米親善委員会の設立
- 四 若松町政と日米親善委員会
- 五 宮崎町政と日米親善委員会
- 六 砂川地区日米連絡協議会の誕生——むすびにかえて

## 一 六〇年目を迎える砂川闘争——はじめにかえて

東京都の砂川（現・立川市）というところ、いわゆる「砂川闘争」のイメージが強く、真つ先に連想されやすい。だが、よく知られているこの砂川闘争が、「なぜ砂川で起こったのか」「どのようなプロセスで闘争にまで発展したのか」と

いった根本的な疑問について、まだまだ未解明の部分は多い<sup>(1)</sup>。

一九五四（昭和二九）年六月、闘争の舞台となった砂川村は、町制を施行した。それから約一年後の五五年五月、宮崎町長を先頭に、町ぐるみの態勢が築かれた米軍立川基地の拡張に反対する砂川の闘いは、内灘・浅間山・妙義山に続き、小牧・木更津・新潟と各地で発生した「基地反対闘争の天王山」といわれ、全国から注目を集めることとなる。基地拡張のための強制測量をめぐって、地元の農民をはじめ支援に來た労働組合員・学生らが警官隊と激突を繰り返かえし、流血の事態へと陥っていった。こうした一連の闘争が「伊達判決」を引き出し、さらに時を経て、七七年一月の米軍立川基地の全面返還とその後の跡地利用へとつながり、現在の駅前を中心とした立川市のまちづくりに結びついてきた。そして、二〇一五（平成二七）年、砂川闘争はスタートから六〇年目の節目の年を迎える。

その一方で、立川基地の存在はたしかに大きかったが、東西に細長く伸びる地勢の砂川町は、同じ米軍の横田基地の所在地でもあったことは見落とされやすい。実は、この横田と周辺自治体の親睦を図る目的で、砂川闘争から約二年前の一九五二年二月、「日米親善委員会」が新たに設けられていた。その場で、横田基地の司令官と地元市の町村の代表が定期的に会合し、いろいろなイベントが企画され、闘争以前に、相互の交流が深められていたのである。こうした試みは、横田だけの取り組みではない。この時期、米軍基地と地元自治体が親善を深めるため、日米親善委員会と同じ目的の「日米地方連絡協議会」が全国各地に設置されていた<sup>(2)</sup>。しかし、日米地方連絡協議会に関する先行研究は、管見のかぎり見られず、日米親善委員会についても、自治体史で若干触れられているにすぎない<sup>(3)</sup>。

そこで、本稿では、立川市歴史民俗資料館が所蔵する「砂川村役場文書」をもとにして、横田基地を対象とした日米親善委員会がどういった活動を行ない、参加自治体の一つである砂川村（町）がどのように対応していたのかを明

らかにしたい。とりわけ、砂川闘争により、在日米軍との交流の場である日米親善委員会に対して、砂川町の姿勢に変化が見られるのか否か、という点に注目してみたい。そうすることで、複眼的な視点により、砂川闘争の実態を改めてつかみ直し、凝り固まった既成のイメージを打ち破ることにつながればと考えている。

## 二 日米地方連絡協議会とは

まず、前述の日米地方連絡協議会が、どういう目的で生まれたのであろうか。砂川町役場が作成した「昭和二十八年起 日米親善協議会之綴」のなかには、誕生の経緯を示す上級機関の資料が、四点挟み込まれている。

この四点のうち、最も古い資料が、一九五二（昭和二七）年一月二十九日付で極東軍司令官が発信した極東陸海空軍各司令官宛ての訓令であった。これは米軍内の機密文書で、砂川町の綴には、英文の原文と仮訳が存在する。はじめに、「地方連絡協議会に関する件 (Community Relations Advisory Councils)」というタイトルが掲げられ、極東軍司令官は日米合同委員会での協定に従い、「米軍職員と地方在住日本人との間の親善関係促進を目的とする (for the purpose of promoting good relations) 地方連絡協議会の結成を許可しこれを奨励する」と、各司令官へ伝えている。続いて、この文書では、「協議会は日米何れか一方により開始せられる非公式折衝により設置される。もし軍司令官によりその折衝が始められるときは本協議会は地方自治体及び米軍の相互の利益のために活動する純自発的機関として提案されなければならない」と、協議会の設置の仕方についても細かく指示していた。米軍による一方的な機関ではなく、日米双方の「純自発的機関」(a purely voluntary organization) となることが、ここでは表向き目指されている。

他方で、訓令では、「本計画の価値は予測される摩擦面を取除き必要な諸計画、諸政策の完全な理解及び支持に大きな助けとなる非公式関係を作る (provides an informal relationship of great assistance) ことにある」と、今回の計画の狙いについても触れられており、すでにこの時点で、協議会の設立が当時の基地問題に対する地元住民の反発を和らげる懐柔工作であったことがうかがえる。<sup>(4)</sup>

二番目に古い資料は、一九五三年六月一〇日付で日米合同委員会風紀分科委員会が発信した合同委員会宛ての勧告で、この文書にも、英文の原文と訳文が存在する。売春問題について議論してきた風紀分科委員会が、改善策として、地方連絡協議会の設立とその有効な運営を促進・助長するため適当な措置を取るよう、日米合同委員会に勧告している。しかも、ここでは合同委員会だけでなく、日本政府にも協力を要請する文言が含まれていた。つまり、日本政府が関係自治体の首長に対して、在日米軍の現地司令官と協力して連絡協議会を設立し、これを有効に運営するよう勧告することを求めていた。また、この勧告の末尾には、将来、地方連絡協議会の設置が予想される具体的な地域として、表1のように一三の区域が列挙されている。そこには、米軍横田基地も含まれていた。<sup>(5)</sup>

三つ目の資料は、「日米地方連絡協議会設置要領」である。これは英文のものではなく、作成年月日・作成者ともに不明であるが、次に示す「七次官通牒」のなかで参考資料として添付されているので、通牒より前に作られたものと推定しうる。そもそも、この資料はタイトルからうかがえるように、これまでの議論を受けて、協議会の位置づけ・性格をまとめた内容となっている。まず冒頭、「日本国民と駐留軍の緊密なる協力及び双吾親善<sup>(マヤ)</sup>を図るとともに両者間の社会関係を改善するため現地日米関係当局において連絡協議するをもつて目的とする」と、協議会の目的がはっきりと示された。それから、委員の構成メンバーについても明示しており、日本側は地方自治体の長・公安委員・教

表 1 風紀文化委員会の勧告で想定されていた地方連絡協議会の設置地区

1953年6月現在

都道府県	市町村	米軍施設名
北海道	千歳町	キャンプ千歳
青森県	大三沢町	三沢飛行場ほか
山形県	東根町	キャンプヤングハンス（神町キャンプ）
宮城県	仙台市	キャンプ仙台
東京都	福生市	横田飛行場
東京都	立川市	立川飛行場
千葉県	木更津市	木更津飛行場
神奈川県	横須賀市	横須賀艦隊司令部ほか
静岡県	富士山麓1町7か村	東富士演習場
大阪府	豊中市	伊丹飛行場
鳥取県	米子市	米子射撃場
福岡県	福岡市	板付飛行場ほか
長崎県	佐世保市	佐世保艦隊司令部ほか

注：砂川町役場「昭和二十八年起 日米親善協議会之綴」（立川市歴史民俗資料館所蔵）をもとに作成。

育長・警察署長・保健所長・婦人少年室長・PTA会長・婦人団体その他代表者・民間有識者など、米軍側は現地軍司令官・法務宗教関係担当官・憲兵隊長など、と具体的に列記されている。さらに、協議会の運営についても明確化された。基本的に、「本会において協議した事項は現地的に<sup>(ママ)</sup>処理する」と位置づけたうえで、それも困難な場合は「日米合同委員会に付託することを得る」と、それぞれの役割を定めている<sup>(6)</sup>。

在日米軍・日米合同委員会での協議を受け、日米地方連絡協議会の中身が練られた結果、一九五三年六月一日、「駐留軍施設周辺の風紀対策に関する件」というタイトルの七次官通牒が、安井誠一郎東京都知事に発せられた。国家地方警察本部次長・自治庁次長・法務事務次官・外務事務次官・文部事務次官・厚生事務次官・労働事務次官によるこの七次官通牒が、四番目の最後の資料である。前述の三つの資料を別紙として添付したうえで、日米合同委員会での合意事項が通牒で伝えられた。そこ

では、「現地日米両当局間の意志疎通を図るため関係地方に『地方連絡協議会』を設けて、風紀問題を含めて現地駐留軍と日本人との社会関係改善に関する問題を処理する」と決められた方針を都知事に示すとともに、関係自治体にもその方針を連絡してほしいと依頼している。<sup>(7)</sup>

このように、日米地方連絡協議会は米軍基地をめぐる社会問題を改善するため、在日米軍と周辺自治体が意思疎通を図り、相互の親善を深めようと構想された機関であった。ただ、それだけでは、表向きの説明である。さらに掘り下げれば、協議会設置の計画は、アメリカ側からの働きかけであり、地元住民の基地問題への反発を和らげるための懐柔工作であったと、四点の断片的な資料から考えられる。

### 三 米軍横田基地と日米親善委員会の設立

それでは、この日米地方連絡協議会が実際、どのように設置されていったのであろうか。ここでは、米軍横田基地を例に、日米親善委員会の発足の経緯を明らかにしてみたい。まず、前史として、敗戦後の横田基地の開設とそれに伴って生じた基地問題について触れることにする。

一九四五(昭和二〇)年九月、米軍に接収された陸軍多摩飛行場は、翌年八月には、米軍基地として公式に開設され、「横田飛行場」あるいは「横田基地」と呼ばれるようになった。その一方で、福生町(現・福生市)には、米兵を相手とする「夜の女」が登場し、朝鮮戦争が始まると、全国各地から集まってくるようになる。「パンパン」「オンリー」といわれた彼女たちは、町内外に散在した「置屋」を拠点に増加の一途をたどり、「基地の町・福生」を象徴する存在となっていっ

た。<sup>(8)</sup> 米兵相手の女性の実数は明らかではないが、五二年一二月現在で、福生町には七〇〇人いたといわれている。<sup>(9)</sup> 勢調査によると、一九五〇年の時点で、福生町の総人口は一万四六六九人、そのうち女性の総数は七二四七人であった。<sup>(10)</sup> 前述の米兵相手の女性数は推定値にすぎないが、当時、福生町の女性人口の約一割に相当する人数に達していたことが分かる。存在感を増す「夜の女」に対する取締の強化について、地元では賛否両論入り乱れるなか、横田基地と福生町は、まさに日米合同委員会で議論されていた風紀問題への対応に苦慮していた。

こういった売春の問題を背景に、日米親善委員会が一九五二年一二月に発足している。ところで、「日米親善協議会之綴」で一番最初に綴られた資料は、五三年二月二六日に横田基地で実施された日米合同懇談会の開催通知である。<sup>(11)</sup> したがって、「日米親善協議会之綴」では、委員会の結成から三か月間の活動は不明であり、この時期については現在のところ、ローカル紙『福生新聞』の記事に依拠せざるをえない。

日米親善委員会の第一回会合について、一九五二年一二月二五日付の『福生新聞』はこう報じている。

国連防衛軍と日本人間の親善関係を固めようとする極東空軍政策に従つて横田空軍基地は最近基地附近<sup>(12)</sup>の地方団体の代表を含む親善委員会の第一回目の会合をした。

福生、西多摩、村山、瑞穂各町村からの代表は空軍将校委員と共に委員会の基礎工作をなし将来の会議の趣意を論じあつた。

日米間の親善運動は以前にもここで行はれたことがあるが日米間の特別文化計画のため常設委員会が編成されたことはこれが最初なのである。<sup>(12)</sup>

この記事では、はっきりと明言していないが、米軍サイドからの働きかけで、第一回会合が開かれたことが、文面からうかがえる。しかしながら、『福生新聞』の記事は、第一回会合の日時と場所を記しておらず、なぜ「日米地方連絡協議会」ではなく「日米親善委員会」という名称にしたのか、という命名の事情についても分からない<sup>(13)</sup>。ただ、現時点では、日にちの特定はできないが、引用記事に「最近」という文言があり、前号の『福生新聞』が一九五二年一月二五日付であることから、おそらく同年一月二月ではないかと推測しうる。また、場所についても、米軍の呼びかけであったと想定すると、横田基地で行なわれた可能性が高いと考えられる。

当日、米軍側は、横田基地のステイバース司令官ら七人が参加し、地元からは、福生町・瑞穂町・西多摩村(現・羽村市)・村山村(現・武蔵村山市)・砂川村の各町村長など一六人の代表が顔をそろえた。地元側のメンバーには、青梅市の飛田青年団長を除き、各自治体とも町村長・町村議会議長・町村教育委員会委員長の三人が委員として任命され、砂川村からは、若松貞次郎町長・小林英嗣町議会議長・宮野卯一教育委員長が出席している<sup>(14)</sup>。

冒頭、ステイバース司令官は、「我々はこの二、三カ月日米親善関係は大変良好であったと信ずる。今やこの関係を決定的計画に発展させ増進させることが出来る段階に達していると思う<sup>(15)</sup>」と、開会の辞を述べた。続いて、基地憲兵隊のミード中尉が、「この基地の米空軍兵士達は日本について知る機会をほしいと思つている。そして日本を去る時米国の良い印象を残したいと希<sup>(つづ)</sup>んでいる<sup>(16)</sup>」とあいさつし、委員会結成の意図について説明している。基地問題を背景に、何とか周辺の自治体と親善関係を築きたいという積極的な姿勢が、二人の発言に表れている。いかえれば、司令官らの友好的なスタンスは、あくまでも「純自発的機関」の発足を目指す日米軍・日米合同委員会の方針と合致するものであった。ただ、ここで注意しておきたいのは、一九五二年一月二月という日米親善委員会の結成時期である。

前節で見たように、この時期は極東軍司令官が訓令を出したところと重なり、日米合同委員会風紀分科委員会の勧告や七次官通牒よりも早い。つまり、横田基地の日米親善委員会は、七次官通牒に基づいて結成されたものでなく、極東軍司令官の訓令を受けて、早い段階に発足した「日米地方連絡協議会」の一形態であったと考えられる。

第一回会合では、今後の方針として、三つのが決められた<sup>17</sup>。一つは、定例会を毎月一回開催するということがある。次に、日米の子どもたちがお互いに知り合う機会をもつため、子どものための親善計画に取り組むことが決議された。また、地元側からは「米国についてもつと知識を得たい<sup>18</sup>」との希望が出され、そのためにも、三つ目の方針として、遠足・競技会・パーティーといった企画が具体的にもち上がっている。日米間の摩擦を取り除き、親善を深める取っかかりとして、真つ先に子どもたちの交流が重視されていたことは、興味ぶかいといえよう。

#### 四 若松町政と日米親善委員会

日米親善委員会がスタートした時、砂川村の村長は若松貞次郎であった。その後、若松村（町）政期に開かれた委員会の定例会は、表2の通りである。発足当初、委員会に参加した自治体は、青梅市・福生町・瑞穂町・西多摩村・村山村・砂川村の一市二町三か村であったが、一九五三（昭和二八）年六月には、多西村（現・あきる野市）・東秋留村（現・あきる野市）・拝島村（現・昭島市）の加入が認められ、合計九市町村となった。また、五三年一二月の定例会で、委員会の隔月開催が決められ、翌年から適用された<sup>19</sup>。

表2で示されているように、各回の定例会では、当番者が置かれ、およそ三回に一回は横田基地で開かれている。

表 2 日米親善委員会定例会の活動記録（1952年12月～55年4月）

開催年月日	開催地	当番者
1952. 12. ?	横田基地？	横田基地？
1953. 1. 23	横田基地将校クラブ	横田基地
2. 18	—	—
3. 11	福生町役場	福生町
4. 8	西多摩村役場	西多摩村
5. 15	横田基地	横田基地
6. 17	山口貯水池事務所	瑞穂町・村山村
7. 22	青梅市役所	青梅市
8. 19	横田基地	横田基地
10. 12	砂川村役場	砂川村・拝島村
11. 18	東秋留村役場	東秋留村・多西村
12. 16	横田基地将校クラブ	横田基地
1954. 1. 20	横田基地将校クラブ	横田基地
3. 10	青梅市役所	青梅市
5. 19	福生町役場	福生町
6. 22	横田基地	横田基地
7. 21	村山貯水池畔	瑞穂町・村山村
9. 22	砂川中学校講堂	砂川町
11. 17	横田基地将校クラブ	横田基地
1955. 1. 21	横田基地将校クラブ	横田基地
3. 23	多西村役場	多西村

注：砂川町役場「昭和二十八年起 日米親善協議会之綴」（立川市歴史民俗資料館所蔵）と『福生新聞』の記事をもとに作成。開催地・当番者で不明のものは、罫線で表記した。

このころ、定例会が地元自治体で催される場合、各市町村の役場が会場として多く使われ、瑞穂町と村山村、東秋留村と多西村、砂川村と拝島村は、それぞれ共同で当番を引き受けていた。<sup>(20)</sup> 当番者はまず、事前にメンバーである各市町村長に宛てて、定例会の日時と場所を示した開催通知を発送する。それを受け、首長は同じ市町村内のほかの委員である議長と教育委員長に出席要請の連絡を行なった。このほか、定例会の当日には、横田基地の派遣した車が役場まで迎えに来ており、在日米軍が会場までの送迎を担っている。<sup>(21)</sup>

一九五三年一月に開かれた第二回の日米親善委員会では、米軍側の提案により、文化・娯楽を通して交流を図るため、行政面だけに限られる親善委員会とは別に、「日

米親善小委員会」を新たに設置することが承認された。ここでの決定を受け、さっそく同月二九日には、小委員会の第一回会合が開催されている。砂川村からは、村議会の小林英嗣議長と鳴島勇副議長、そして、のちに町長として砂川闘争の先頭に立つことになる宮崎伝左エ門教育委員の三人が参加した。その場で、在日米軍のシェンバーグ大尉は、「こうした懇談会は横田基地だけでなく、全国各地のある所では全部こうした会合をやっているのです」と出席者に理解を求め、実地見学によって日米間の親善交流を深めたいと強調している。そのうえで、日米双方による懇談に入った。各委員はスポーツ・手工芸・娯楽の三つのブロックに分かれて話し合い、スポーツ関係からは野球の交流試合、手工芸ブロックでは写真の展覧会、娯楽グループからはファッションショー・ダンス・芝居・生け花・ひなまつりといった具体的なイベントが提案されている。<sup>(22)</sup>

これらのユニークな試みは、次々と実行に移されていった。例えば、一九五三年三月七日には、基地周辺の自治体がひな人形を貸与する形で、ひなまつりが横田基地内で実現している。続いて同月一四日、今度は砂川中学校講堂で、日米親善音楽会が開催された。若松村長らが出迎えるなか、ジープやバスでやってきた横田の関係者二五人が、ブラバンドの演奏を披露している。音楽会終了後には、砂川の人たちが慰労会をセッティングして、かれらをもてなした。同年四月一〇日には、地元の自治体が桜の枝木を調達し、横田基地で桜まつりを企画している。これが好評だったのか、後日、各市町村が負担し、桜樹が基地に寄贈され、そのお礼に、しゅろの木が米軍から贈られている。一方、スポーツの交流も盛んであった。四月一八日から二日間、基地内で開催された野球見物のプランが組まれ、同月二八日には、カップ争奪のピンポン大会が開かれている。卓球のうまい者が各自治体から二人ずつ集められ、大会後、米兵との懇談の場がもたれた。また、日米親善小委員会は小学校の教員を対象とした基地見学を五月四日に計画し、砂

川村からは、砂川小学校の一・二・四年の学級担任と西砂川小学校の一・二年の学級担任がそれぞれ参加している。このほか、同年八月には、小委員会による鳩ノ巢へのピクニックも企画された。各市町村がピクニックの参加者を五人まで募り、ビールを準備する一方で、米軍側は自動車を役場へ差し向けたり、食事の負担をしている。<sup>(23)</sup>

矢継ぎ早に立てられた交流の催しを足がかりとして、一九五三年四月以降、砂川村役場には、横田で行なわれる基地関係者の慰安を目的としたさまざまなイベントの招待状が届くようになった。例えば、横田基地の日本人厚生会が芸能人を招いて主催する「グランドショー」や野球の試合、将兵・従業員によるボクシングなど、多岐にわたっている。これらの招待券は初めのうち、米軍から親善委員会の委員である村長・議長・教育委員長長の三人にだけ送付されていたが、チケット配布の範囲は広がり、同年七月二八日に横田基地で実施されたボクシングには、砂川村から多くの人たちが見学し、まだなじみのない新しいスポーツを目の当たりにした。砂川村勤労者組合（二六人）・西部婦人会（二人）・母の会（一人）・教育委員（三人）・西砂川小学校職員（三人）など、村内の各種団体ごとに希望者が集められ、合計六九人に及んだ砂川の参加者たちは、米軍の用意した大型バスで送迎してもらっている。<sup>(24)</sup>

こうした娯楽イベントに止まらず、横田基地で毎年挙行される米軍の記念行事にも、日米親善委員会の地元側の委員三人が誘われるようになっていった。一九五三年七月四日に行なわれた独立記念祭に続いて、七月三一日から三日間開催されたカーニバル、翌年五月一日には、陸・海・空軍の「三軍統合記念日」の祝賀式にも、貴賓として招待されている。五四年七月に開かれた独立記念祭の時には、招待者は村長・正副議長・助役・正副教育委員長・教育長まで広げられ、前年の三人から七人へと倍増された。さらに進んで、米軍機の見学にも横田基地から招かれるようになる。同年一月五日に横田で実施されたB-36長距離重爆撃機の見学会の案内状が砂川町に届くと、若松町長名で

議長と教育委員長に出席要請の通知がそれぞれ出された。<sup>(25)</sup> 普段閉ざされている基地を開放することで、身近に感じてもらい、理解してもらいたいという米軍サイドの積極姿勢が、横田基地の現場でも表れていたといえる。

一方、日米親善委員会の定例会はその間、表2のように会合を重ね、一九五三年一月一日、初めて砂川で開かれた。当番者となった砂川村は、一〇月六日には、役場を会場とする若松村長名の開催通知を横田基地と八市町村へ発送し、同時並行で、終了後の懇親会の準備も進めている。出席予定者四三人分のビール・りんご・ぶどう・袋菓子が用意され、拜島村が三〇〇〇円を負担するものの、経費の合計は七八二六円に達していた。会議の冒頭、横田基地の司令官が、「この席をおかりして若松村長にお礼を申上げる。砂川村と横田基地とは近接している。それだけに亦基地との問題も多い」とあいさつすると、さっそく米兵の犯罪から飛行機事故・農作物被害の補償問題まで次々と指摘され、突っ込んだやり取りがなされている。<sup>(26)</sup> 米軍の積極的な働きかけのもと、若松村長の時代に誕生した日米親善委員会は、さまざまなイベントを企画し、日米交流を推し進めていた。

日米親善委員会が交流の実績を積みながら、一九五三年八月五日、前述の七次官通牒を受け、福生町と立川市の関係者が集まり、「日米地方連絡協議会」の設置に向けて協議している。<sup>(27)</sup> 福生では、先行する日米親善委員会と風紀問題を扱ってきた「福生町振興対策委員会」の二つの会が主体となり、「福生地区日米連絡協議会」が新設され、九月には、委員の委嘱が行なわれた。<sup>(28)</sup> 福生町の森田幸造町長を会長に据え、同年一〇月に初会合を開いた福生地区日米連絡協議会は、「町民と駐留軍との意志の疎通を図り緊密な連絡のもとに相互の親善と両者間の社会関係の改善に関する諸問題を連絡協議し現地において解決すること」を目的として掲げており、その点は日米親善委員会と一致している。<sup>(29)</sup> ただ、福生地区の協議会には、関係町村の委員として、砂川の若松村長も参加しているが、多くは福生町の各種団体の

代表者で構成されており、親善委員会と違って、福生町中心という地域限定の組織であった。<sup>(30)</sup> また、福生地区日米連絡協議会の発足に際して、たしかに親善委員会は主体となっているものの、協議会に合流して解散したわけではなく、両者は別個の組織として並存している。

他方、立川では、すでに存在した「日米月例懇談会」という友好団体を基盤にして、一九五三年一月、「立川地区日米連絡協議会」が発足し、初めての会合が開かれた。委員のメンバーには、福生地区と同様に、周辺の五町村の関係者も加わるが、多くは立川市の関係者で占め、トップには、立川市の板谷信一郎市長が就任している。<sup>(31)</sup> 立川市側の委員だけで二〇人を数え、なかには婦人会長や教員組合委員長も参加していた。さまざまな立場からの自由かつ達な議論のなかでは、率直に「米軍のご意見拝聴機関」と協議会の行き詰まりを指摘する場面も見られた。<sup>(32)</sup>

## 五 宮崎町政と日米親善委員会

一九五五（昭和三〇）年四月三〇日、前年の六月に町制施行した砂川町で、初めての町長選挙が実施された。前職の若松貞次郎の推す砂川三三と、「若松派」に対抗する「宮伝派」の宮崎伝左エ門が立候補したこの町長選は、その後の砂川町の進路を大きく左右する転機となる。もともと、砂川も宮崎も保守であったが、宮崎はウイングを広げ、戦後改革期に村内で生まれた革新勢力の勤労者組合と政策協定を結び、左派社会党の山花秀雄の応援も得て、新住民の多い南部地区の浮動票の掘りおこしに努めた。この作戦が功を奏して、宮崎はわずか七票差で、劇的な勝利を収めた。選挙戦の余韻がまだ町内で漂うなか、砂川闘争の起点となる出来事が起こる。五五年五月四日、東京調達局立川事

務所の川畑所長らが当選して間もない宮崎町長を訪れ、非公式ながら米軍立川基地の拡張計画案を通告した。六日には、拡張予定地の関係者が集まり、「砂川町基地拡張反対同盟」を結成して、計画案に反対することを決める。続いて同月八日、「砂川町基地拡張反対総決起大会」が開かれ、宮崎町長を先頭に、町ぐるみで闘う態勢が築かれていった。こうして、砂川闘争が始まるとともに、砂川町は立川地区日米連絡協議会への参加を見合わせている。<sup>(33)</sup>

一方、米軍と対峙する組織づくりが進展していたこのタイミングで、横田基地のステイバース司令官は、宮崎町長に当選祝いの書簡を送っていた。反対同盟が発足した五五年五月六日付で、司令官は次のように祝意を表している。

横田米空軍基地将兵に代りまして貴殿が町長選挙に御当選なさいました事を心からお祝い申し上げます。

当基地に勤務又は関係ある人々が貴町に多数居住致し又当基地の将兵も御地にしばしば勤務上又は社交上の事で往復致して居ります。当基地では二年前より基地附近<sup>(32)</sup>の市町村と相互のより良き理解と協力を深める目的で定期的に日米親善委員会を催して居りますが、貴殿の御参加を戴きますれば誠に幸甚に存じます。<sup>(34)</sup>

おそらく、ステイバース司令官は立川基地拡張をめぐる砂川町内の混乱をまだ熟知していない状況で、宮崎町長に祝意を伝えたと考えられる。ここで、ステイバース司令官は日米親善委員会の意義を改めて説明し、前任の若松町長と同様に委員会へ参加することを求めていた。それに対して、宮崎町長は横田基地の日米親善委員会の活動に、どう対応したのであるか。「日米親善協議会之綴」を見るかぎり、宮崎町長の就任後、明らかな変化はうかがえない。砂川闘争によって、砂川町は日米親善委員会のメンバーから脱退しておらず、横田基地司令官との関係は断絶して

表3 日米親善委員会定例会の活動記録（1955年5月～59年12月）

開催年月日	開催地	当番者
1955. 5. 21	横田基地将校クラブ	横田基地
6. 23	福生町役場	福生町
8. 25	都水道局羽村取水所	西多摩村
10. 20	村山貯水池畔	瑞穂町・村山村
12. 15	横田基地将校クラブ	横田基地
1956. 2. 9	横田基地将校クラブ	横田基地
4. 12	青梅市公民館	青梅市
6. 26	秋多町役場	秋多町
8. 28	日原鍾乳洞	福生町
10. 23	都立種畜場	瑞穂町・村山村
12. 20	横田基地将校クラブ	横田基地
1957. 3. 28	横田基地将校クラブ	横田基地
5. 21	青梅市役所	青梅市
6. 13	横田基地将校クラブ	横田基地
8. 21	都水道局羽村取水所	西多摩村
10. 21	秋多町役場	秋多町
11. 14	横田基地将校クラブ	横田基地
12. 12	横田基地将校クラブ	横田基地
1958. 4. 9	横田基地将校クラブ	横田基地
5. 14	福生町役場	福生町
7. 24	山口貯水池事務所	瑞穂町・村山村・砂川町
9. 16	青梅総合病院講堂	青梅市
12. 26	横田基地将校クラブ	横田基地
1959. 3. 19	横田基地将校クラブ	横田基地
5. 27	羽村国民宿舎清流荘	羽村町
7. 30	立川国際カントリークラブ	秋多町
10. 7	砂川町公民館	砂川町
12. 17	横田基地将校クラブ	横田基地

注：砂川町役場「昭和二十八年起 日米親善協議会之綴」（立川市歴史民俗資料館所蔵）と『福生新聞』の記事をもとに作成。1955年4月1日、東秋留村・多西村・西秋留村が合併し、秋多町が誕生した。56年10月1日には、西多摩村が町制を施行し、羽村町となっている。

いなかった。それゆえ、同じ在日米軍でも、砂川町は立川基地と横田基地に対して異なる措置をとっている。

表3のように、闘争が始まってからも、日米親善委員会の定例会は引き続き開かれ、毎回、開催の通知が役場に届くと、若松町長の時代と同じように、宮崎町長名で議長・教育委員長に出席を要請している。<sup>35</sup> なかでも、宮崎町長にとって就任後初となった一九五五年

五月の定例会は、三軍統合記念日と重なっていた。そのため、委員会のメンバーは午前一〇時に閲兵式と編隊飛行を見学し、一一時一五分から定例会、それが終わると、司令官主催の昼食会に参加して、午後からは野球の見物と、多くの催しが計画されていた。宮崎町長がこの場に出席していたかどうか、現時点では定かでない。ただ、この定例会の開催通知を受けて、町長が議長・教育委員長に出席を求めた控えの文書は残っている。また、同年一〇月の定例会で、砂川町の提出した要望事項のメモが残っており、宮崎町長になってからも変わらず、親善委員会にコミットしていたことが資料から裏付けられる。この要望事項において、砂川町は基地内の排水溜の氾濫と井戸水のガソリン汚染に対する対策を米軍に求めており、あくまでも横田の問題に限定して、立川基地拡張の問題については一切触れていなかった。<sup>(36)</sup>五七年八月に開かれた定例会においても、宮崎町長は汚水に悩む中里地区への給水継続を要望し、それに対して、ジョンストン司令官が承諾している。<sup>(37)</sup>

一方、宮崎町長の時代には、日米親善委員会の開催地の傾向に、変化が表れていた。表2と比べ、表3の開催地はバラエティに富んでいる。例えば、一九五六年六月の定例会の会場は、秋多町役場となっているが、会議終了後、草花菖蒲園の見学と秋川での鮎漁が予定されていた。同年八月の定例会は、福生町が当番であったが、涼を求めてか、水川町（現・奥多摩町）の日原鍾乳洞で行なっている。また、同年一〇月の定例会は、瑞穂町と村山村が当番者であったが、地域の畜産業の拠点である青梅市新町の都立種畜場を会場に、五八年九月の定例会の開催地となっている青梅総合病院は、前年一二月に開院したばかりの新施設であった。このほか、五九年七月の定例会で、秋多町（現・あきる野市）が会場に選んだ立川国際カントリークラブは同年八月に開場を予定していたゴルフ場で、いわばお披露目として、会議終了後に参加者たちがプレーを楽しんでいる。<sup>(38)</sup>このように、打合せ終了後の先進地の視察・観光・娯楽も

想定し、工夫を凝らした形で、当番者が会場を設定していた。それだけ、相手をもてなす気持ちが高まっており、米軍サイドと地元側の相互交流は着実に根づいていたといえよう。

日米親善委員会の活動が軌道に乗っていたことは、開催地の傾向以外からもうかがえる。一九五五年六月の定例会では、委員会の発足以来、尽力してきたステイバース司令官の帰国の決定を受け、地元側が記念品を贈呈することを企画し、一市町村あたり千円の負担を割り当てて、その場で徴収していた。<sup>(39)</sup>五七年六月、横田基地の新司令官となったジョンストン大佐は、着任のあいさつで「横田基地と隣接市町村の間に存在する誠に卓越せる日米親善関係は三多摩地区のみならず広く関東地区一帯にその名声を高めております」と述べており、<sup>(40)</sup>社交辞令が含まれているとはいえ、横田基地の日米親善委員会は当初の目的を達成し、米軍内で定評を得ていたと考えられる。

一九五七年五月には、砂川闘争で揺れる宮崎町長が、横田基地のフレッチャー司令官をはじめ四人の基地関係者に感謝状を贈った。五二年以来、井戸水の汚染で悩まされてきた西砂地区に、基地のタンク車を二年あまり常置して、給水対策に万全を期してきたことに対する感謝の意を、町民を代表して伝えている。<sup>(41)</sup>五七年一月には、横田基地の将校夫人クラブが、周辺自治体の経済的に恵まれない高校生一七人に対して奨学資金をプレゼントし、第一回の贈呈式が行なわれた。この将校夫人たちの試みは、日米親善委員会に諮ったうえで実現したもので、砂川町からも三人の高校生が受け取っている。<sup>(42)</sup>さらに同年一二月、宮崎町長は横田基地の司令官に宛てて、南国土産に対するお礼の書簡を送っていた。司令官からもらった南国の土産が何であったか定かではないが、礼状によると、「町議会議員並役場職員全員がその新鮮なる風味と芳香を満喫し」食したと記されている。<sup>(43)</sup>設立から五年を経て、日米親善委員会は横田基地をめぐるさまざまな問題をクリアしながら、親善交流を深めていた。地域の生活実態や身近な問題を認識したう

えて、よりきめ細かな支援と協力の輪が生まれ、感謝の気持ちが地元側から表明されていたのである。

一方、若松町長の時代に多かった野球やボクシングといった娯楽イベントの誘いは、「日米親善協議会之綴」を見れば、影を潜めている。それに代わり、米軍の記念行事や米軍機の見学会へ招待される機会が増え、定着していった。例えば、三軍統合記念日の祝賀会の招待状は、宮崎町長就任後も毎年のように届いている。夏のカーニバルも定番化し、地元の人びとにとって、おなじみの祭りとなっていた。ただ、宮崎町長の時代、さらなる内容の充実が図られており、その新しい傾向は無視できない。一九五八年八月三〇日から三日間開催されたカーニバルでは、初めての試みとして、横田基地と周辺自治体のコラボによるイベントが企画された<sup>(4)</sup>。

日米共同で祭りを盛り上げるために、各市町村の職員は一堂に会する形で、事前打合せを二回行なっている。初回は八月一日に横田基地で、二回目は同月九日に福生町役場で実施され、砂川町からは、いずれも庶務課長の篠田治助が出席した。篠田の出張報告書によると、最終的に、見本市・演芸・「美人コンクール」の三つの企画に協力することを申し合わせ、具体的な進め方やそれぞれの分担について確認している。市町村ごとにスペースを提供され、特産品などを展示・販売する見本市では、各自治体は内部の装飾を任せられ、一五日までに計画案を提出するよう指示されていた。二つ目の演芸は、各市町村が約一時間のもち時間で演目を披露するもので、「砂川音頭」やコーラスなどが砂川町の案として上がっている。そして、三つ目の「美人コンクール」は、基地内で選ばれた「ミス横田」と地元自治体から推せんされた女性を水着姿で審査し、カーニバルの「女王」を決めるイベントで、各市町村には候補者を二人ずつ出すよう要請されていた。しかも、候補者の氏名・略歴・年齢・身長・体重・スリーサイズといった情報を事前に伝えるよう求められており、砂川町は要請に応じて、宮崎町長名でもって二人の女性を推せんしている。このほ

か、各市町村には、カーニバルに合わせて基地で発売される一枚一〇〇円の宝くじの購入も依頼され、二五枚の割当を受けた砂川町では、宮崎町長ら三役をはじめ議長・教育長から職員まで一人一枚ずつ二五人で引き受けていた。<sup>(45)</sup>

日米共同による初めてのカーニバルは、地元側にとって決してメリットばかりではなかった。経費をはじめ、あらゆる面で負担は大きい。また、「日米共同」とはいつても、実態は基地からの要請に応える一方で、それぞれの市町村が主体的に参画するという域にまで達してはいなかった。ただ、当時としては、基地問題の解消を目指すという点で、大きな前進であったにちがいない。司令官に招かれて、ただ出席するだけでなく、地元の自治体が基地の催しに協力し、日米共同で取り組むという新たな試みは、これまで積み上げてきた親善事業の成果を問うものであった。

## 六 砂川地区日米連絡協議会の誕生——むすびにかえて

宮崎町長の時代においても、前述のように、砂川町と横田基地の交流は継続かつ進展している。それとは対照的に、砂川闘争が起因となって、宮崎町長は立川地区日米連絡協議会への参加を見合わせていた。<sup>(46)</sup> 同じ在日米軍でも横田と立川で異なる対応をとり続けるなか、一九五八（昭和三十三年）になると、断片的ではあるが、立川基地との交流を示す文書が、「日米親善協議会之綴」のなかから出てくるようになる。

一九五八年五月、立川基地司令官のサムズ大佐から宮崎町長に帰国のあいさつ状が届いた。サムズ大佐は砂川闘争時の司令官であったが、宮崎町長はすぐに感謝状を贈っている。そこには、「隣接市町村民に対しては常に国境を越えた隣人愛と厚い御同情を以て事に接し日米親善のために寄与せられた功績は洵に顕著である」と敬愛の念が綴られ

ていた。また、同年七月に、C-47輸送機の墜落事故で二人の米兵が死亡すると、宮崎町長が追悼のメッセージを送り、それに対して、立川基地司令官のカートン大佐から町長宛ての礼状が届いている。同年一〇月には、砂川町が立川基地で催される「秋季日本工芸祭」に招待され、さらに同年末、宮崎町長は立川基地の情報部長を務めるハリス少佐と情報部付のシーバジャー中尉から、クリスマスカードを受け取った<sup>(47)</sup>。前述の日米共同による初めてのカーニバルが横田基地で開かれた前後から、砂川町と立川基地の関係に、少しずつ変化が表れていたといえる。

「日米親善協議会之綴」を見るかぎり、これまで不参加であった立川地区日米連絡協議会に関する文書はほとんどないが、数少ない関連資料として、一九五九年四月三日に開催された協議会のプログラムと、その会の集合時間や場所などを鉛筆で走り書きしたメモが残っている。当日は、立川市を中心とした各種団体の代表者のほか、八王子市・昭島市・日野町・砂川町の首長ら二九人が呼ばれ、午前中、米軍機二機に分乗して、立川上空を見学し、昼から米軍との会合に臨む予定となっていた。前述のメモには「時間厳守」と記され、宮崎町長の名前も米軍機の搭乗者名簿に載っていることから、このころには、砂川町は立川地区日米連絡協議会に出席するようになったと考えられる<sup>(48)</sup>。同年七月には、米軍立川基地からの呼びかけに応え、「砂川地区日米連絡協議会」の新設も決まった。宮崎町長をはじめ正副議長・教育委員長のほか、総務・文教・社会といった町議会の常任委員長も協議会に参加し、砂川町から七人、米軍側から七人、合計一四人でメンバーが構成されている。「闘争は闘争、要求は要求」と割り切る砂川の姿勢の変化を背景に、騒音・風紀・上下水道といった立川基地をめぐる問題を意見交換しながら改善を図る、砂川町と米軍の協議機関として生まれた砂川地区日米連絡協議会は、横田の日米親善委員会から約六年半遅れのスタートであった<sup>(49)</sup>。これまで見てきたように、若松村長の時代に誕生し、さまざまなイベントを通して、横田基地との親善交流を図っ

てきた日米親善委員会は、砂川闘争後も継続している。若松町政を引き継いだ宮崎町長も、親善委員会を脱退しなかった。時には、闘争の前線に対峙しつつも、宮崎町長は在日米軍に対して完全な没交渉というスタンスではなかったのである。むしろ、若松時代よりも、横田基地との親善交流は着実に深まっていた。こうして進展する横田との交流経路が活きる形で、いったん途絶えた立川基地との関係が修復され、再構築されている。

一九五九年一〇月三〇日、宮崎町長ら二二人の砂川町の関係者が米軍立川基地に招かれ、C-47二機に分乗し、飛行見学を行なった。その際、反対同盟の幹部であった町議を含めて、多くの出席者が搭乗するなか、宮崎町長は米軍機に乗らなかつたという<sup>(50)</sup>。町長の胸に去来するものは、何であつたのか。砂川闘争と米軍の懐柔策の間で、リーダーとしてどう対応すべきか。どこまで歩調を同じくし、どこで一線を引くか。在日米軍とのつながりを保ちつつ、矜持をもって苦悩するサブ・リーダーの姿勢が、地上で米軍機を見上げる宮崎の姿に表れていたといえよう。

宮崎町長をはじめ多くのサブ・リーダーたちは、米軍の働きかける地方連絡協議会をどのように受けとめていたのであろうか。当時、宮崎町長のもとで、砂川町の収入役を務めた青木久は、日米親善委員会の印象について、米軍の「住民代表に対する宣撫工作であつた」と語っている<sup>(51)</sup>。青木にかぎらず、多くのサブ・リーダーたちの眼にも、「宣撫工作」と映っていたにちがいない。懐柔策と認識しつつも、実際に参加することで、かれらの意識に変化が表れるのか否か。本稿は表面的な活動のプロセスを扱ったが、当事者たちの内面の分析も、今後の課題として重要である。

(1) 筆者は以前、砂川闘争の内在的要因を探るため、拙稿「砂川村役場文書にみる砂川村勤労者組合」(白井哲哉編『近代地方公文書アーカイブズの構造と情報に関する学際的総合研究』私家版、二〇一四年)において、砂川村勤労者組合の結成と砂川闘争以前の勤労者組合の活動を採り上げた。

- (2) 例えば、青森県三沢市の米軍三沢基地にも、「日米連絡協議会」が一九五三年一月に設置されている（三沢市史編さん委員会編『三沢市史 統通史編』三沢市、二〇〇八年、三九二頁参照）。また、米軍家族宿舍のあった東京都渋谷区のワシントンハイツにも、「渋谷区日米連絡協議会」が五六年一月に発足し、いろいろな問題を解決しながら、日米親善が図られている（渋谷区役所区民課広報係編『親善の八年——渋谷区日米連絡協議会』渋谷区、一九六三年、一頁参照）。
- (3) 『武蔵村山市史 通史編 下巻』では、「日米親善委員会」という名称は出てこないが、村山村の社会教育の特徴として、米軍横田基地との交流が紹介され、日米親善委員会で企画されたイベントが例示されている（武蔵村山市史編さん委員会編『武蔵村山市史 通史編 下巻』武蔵村山市、二〇〇三年、六〇三頁参照）。
- (4) 砂川町役場「昭和二十八年起 日米親善協議会之綴」（立川市歴史民俗資料館所蔵）参照。
- (5) 同右。
- (6) 同右。「日米地方連絡協議会設置要領」は作成者不明であるが、英文のものがなく、文体からみても日本側で作られたものと推測しうる。
- (7) 同右。
- (8) 福生市史編さん委員会編『福生市史 下巻』（福生市、一九九四年）四七二～四七五頁参照。
- (9) 『読売新聞』三多摩版、一九五二年一月九日付参照。厚生省公衆衛生局防疫課の統計によると、一九五三年五月の時点で、福生町には五〇〇人の散娼がいたと報告されている（吉見周子「売娼の社会史——近代の娼婦たち⑯戦後の公娼廃止」『歴史公論』第一〇巻第七号、一九八四年、一三四～一三五頁参照）。
- (10) 総理府統計局編『昭和三十五年国勢調査報告 第七巻 都道府県編 その十三 東京都』（総理府、一九五三年）二八頁参照。
- (11) 前掲、砂川町役場「昭和二十八年起 日米親善協議会之綴」参照。
- (12) 『福生新聞』一九五二年一月二十五日付。
- (13) 砂川町役場「昭和二十八年起 日米親善協議会之綴」を見ると、発足から一九五四年までは、たしかに「日米親善委員会」と「日米親善協議会」という二つの呼び名が混在している。だが、五五年以降は「日米親善委員会」という呼称しか使われなくなるため、本稿では、「日米親善委員会」という名称を用いることにした。
- (14) 前掲、『福生新聞』一九五二年一月二十五日付参照。

- (15) 前掲、『福生新聞』一九五二年二月二五日付。
- (16) 同右。
- (17) 前掲、『福生新聞』一九五二年二月二五日付参照。
- (18) 前掲、『福生新聞』一九五二年二月二五日付。
- (19) 前掲、砂川町役場「昭和二十八年起 日米親善協議会之綴」参照。
- (20) 砂川町役場「昭和二十八年起 日米親善協議会之綴」によると、一九五三年一〇月に砂川村役場で開催された定例会では、拝島村は砂川村と共同で経費を負担しているこん跡がうかがえるが、翌年九月に砂川中学校で開かれた定例会の時には、参加自治体としてカウントされていない。それゆえに、そもそも拝島村ほどの程度、日米親善委員会にコミットしていたのか、本稿では判然としなかった。
- (21) 前掲、砂川町役場「昭和二十八年起 日米親善協議会之綴」参照。
- (22) 『福生新聞』一九五三年二月一日付参照。
- (23) 前掲、砂川町役場「昭和二十八年起 日米親善協議会之綴」参照。この綴によると、日米親善小委員会に関する記録は、一九五四年までしか残っていない。五五年以降は、活動していたのかどうか、定かでない。
- (24) 同右。
- (25) 同右。
- (26) 同右。
- (27) 『毎日新聞』都下版、一九五三年九月五日付参照。東京都の区部では、一九五四年一月に結成された「北区日米連絡協議会」が最初といわれている（『朝日新聞』東京版、一九五四年一月二六日付参照）。
- (28) 前掲、砂川町役場「昭和二十八年起 日米親善協議会之綴」参照。
- (29) 『福生新聞』一九五三年一〇月一五日付参照。
- (30) 前掲、砂川町役場「昭和二十八年起 日米親善協議会之綴」参照。この綴のなかには、東京都福生地区日米連絡協議会結成後の活動の展開を物語る資料は残っていない。
- (31) 『毎日新聞』都下版、一九五三年九月五日付、同年一月一日付参照。新聞記事によっては、「立川市日米地方連絡協議会」

「立川日米連絡協議会」など、異なる組織名がいくつも存在するが、本稿では、「日米親善協議会之綴」に出てくる名称に従い、「立川地区日米連絡協議会」で表記を統一した。

- (32) 『毎日新聞』都下版、一九五三年一〇月三〇日付参照。『読売新聞』三多摩版、一九五六年二月六日付参照。一九五六年七月、立川地区日米連絡協議会は改組となり、委員の人数が二〇人から一〇人に削減された。その際、「革新系の委員が排除された」という声が上がリ、問題視されている（『読売新聞』三多摩版、一九五六年七月三日付参照）。

- (33) 『産経新聞』多摩版、一九五九年七月九日付参照。

- (34) 前掲、砂川町役場「昭和二十八年起 日米親善協議会之綴」。このステイパース司令官の書簡には、英文と日本語訳のものがそれぞれ一通ずつ存在する。

- (35) 前掲、砂川町役場「昭和二十八年起 日米親善協議会之綴」参照。

- (36) 同右。一九五五年五月二七日に開催された第七回東京都日米連絡協議会において、府中市の小林茂一郎市長が砂川町と瑞穂町の基地拡張の問題について質問したところ、司会を務めた東京都の高瀬外務室長が「時宜を得ていない」と米軍側に通訳せず、発言を中止させている（『産経新聞』多摩版、一九五五年五月二八日付参照）。

- (37) 『福生新聞』一九五七年八月二〇日付参照。

- (38) 前掲、砂川町役場「昭和二十八年起 日米親善協議会之綴」参照。

- (39) 同右。

- (40) 『福生新聞』一九五七年七月一日付。

- (41) 前掲、砂川町役場「昭和二十八年起 日米親善協議会之綴」参照。

- (42) 『福生新聞』一九五七年一月二〇日付参照。

- (43) 前掲、砂川町役場「昭和二十八年起 日米親善協議会之綴」参照。

- (44) 同右。

- (45) 同右。

- (46) 前掲、『産経新聞』多摩版、一九五九年七月九日付参照。

- (47) 前掲、砂川町役場「昭和二十八年起 日米親善協議会之綴」参照。

日米親善委員会と砂川町の対応（沖川）

(48) 同右。

(49) 前掲、『産経新聞』多摩版、一九五九年七月九日付参照。

(50) 『毎日新聞』都下版、一九五九年一〇月三十一日付参照。

(51) 二〇一三年八月七日青木久・豊泉喜一聞きとり（文責在筆者）。

〔付記〕

本稿は、科学研究費補助金（基盤研究（C）「近代地方公文書アーカイブズと民間アーカイブズの構造・情報・関連性に関する総合研究」）による研究成果の一部である。執筆にあたって、青木久氏・菅沼寛氏・豊泉喜一氏・立川市歴史民俗資料館・砂川村役場文書研究会（代表・白井哲哉筑波大学教授）のご協力をいただきました。この場を借りて、あらためてお礼を申し上げます。

（本学兼任講師）